美術の窓(86)

茶の湯の造形 ―特別展「五島美術館・大和文華館所蔵名品選」開催にあたって

大和文華館館長　水田　徹

李迪筆　雪中帰牧図（部分）大和文華館

青磁鳳凰耳花入（部分）五島美術館

五島美術館と大和文華館は、共に電鉄会社を母胎とし、開館年次も建物の設計者も同じという、いわば兄弟館の関係にあります。とはいえ私ども大和文華館は、他の美術館と共催という形で展覧会を企画開催するのは、これが始めての経験であります。一方五島美術館は、例えば昨年の徳川美術館との共催展「茶の湯、名碗」のように、すでに立派な実績をお持ちで、今回も共催の実務は五島美術館の先導で進められたと申しても過言でありません。とりわけ図録の製作にあたっては、五島美術館学芸部の長年にわたる図録づくりの伝統とノウハウにすっかりおんぶさせていただくこととなりました。ここに本紙面を借りて、木下館長をはじめ五島美術館のスタッフの皆様に心より御礼申し上げる次第です。

さて、本特別展を企画するにあたり、私個人といたしましても、いささか思うところがございましたので、この点を少し記させていただきます。

もう40年近く昔のことになりますが、私が初めてヨーロッパに留学したときのことです。思いがけず5年もの長い間滞在することとなった結果、現地人との付き合いも深くなり、先生方、先輩、仲間たちの自宅に招かれる機会も増えました。そのときの経験なのですが、ひとしきり談笑が済むと、必ずと言っていいほど、「おまえは日本人なのだから、ここでひとつお茶を点てて見せてくれ」と言われるのです。不調法な私はそれに応えることができませんでしたが、思えば終戦まもなく日本がまだ発展途上国扱いされていた時期のことであります。日本の茶の文化は世界大戦を超えて、長く深くヨーロッパ人の心を捉え続けていた、ということになりましょう。

それから30年、今度は中東の国トルコでの経験です。ご案内のようにトルコ人もお茶を「チャイ」と称し、好んで飲用しますが、あるときそのチャイを頂いていると、トルコの給仕人がつかつかと近寄ってきて、厳しい顔つきで何やら私を叱責するのです。不明の致すところでした。椅子に腰掛けお茶を頂きながら、ついうっかり足を組んでいたのを咎められたのです。お茶は姿勢を正して頂くものだという茶の湯の精神が、同じモンゴリアンのトルコ人の間にも、ものの見事に生き続けているのを知り、ひどく感激いたしました。

そんなわけですから今回の共催展のテーマを「茶の湯」に定めることに、私は一も二もなく賛同いたしました。そして今回皆様方にもご覧頂きますように、両美術館の茶の湯に拘わる美術品を一同に並べてみますと、茶の湯という文化が文字通り総合芸術であり、そこに示された古来の茶人たちの美意識の強さと深さは圧倒的なものがあります。

と同時に、これらの美術品を収集し、美術館を設立した、東京急行電鉄株式会社、五島慶太元会長、そして近畿日本鉄道株式会社、種田虎雄、佐伯勇両元会長、およびその信頼を得て美術品の選定と収集に専念された矢代幸雄大和文華館初代館長、これら先達の先見の明と鑑識眼の鋭さを目の当たりにして、改めて敬服の念を禁じ得ません。

ところでここ数年、我が国の美術史研究者の間に、例えば中国、宋時代の文人画家が描く水墨没骨の「花卉・雑画」を抜きにして、中国磁州窯の「白釉黒掻落文」陶器の勃興は語れないとか、桃山時代の美濃陶磁にそれまでの無地一色に代わって着彩が加わるのは、あたかも海北友松の水墨画に着彩が施されるのと軌を一にしている、といった指摘が現われるようになりました。陶磁と絵画の間に、ジャンルを超えた、造形上の共通項を見い出していこうとする、注目すべき動向と申せましょう。

折しも我が国最古の古美術専門誌『国華』も、その最新号（平成15年6月20日刊）を「茶の造形」と銘打った特輯号とし、その巻頭言で国華編集委員会は「（前略）茶の造形を美術史学の観点から考察した論考は少なく、（中略）すでに茶の湯の文化が日本文化の重要な領域であることが世界的に認識されている今日、その造形と関わる諸命題の解明は、日本東洋古美術研究を本旨とする『国華』への必至の要請と考えられる」と述べています。ここでも茶の湯の造形と美術史との関連に光を当てようとする試みが改めて始まっていると申せましょう。

本共同企画展が、茶の湯の造形のもつ総合性を見ていただく絶好の機会になると同時に、こうした試みを進めていただく一助にもなるのではないか。そうした思いも込めて、本展覧会を開催する次第です。両美術館の名品のまたとない出会いを、存分にお楽しみいただければ幸甚です。

季刊 美のたより №144
平成15年10月11日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.